

CHRISTIAN CLASSICS

NO. 6

NOTES ON DEUTERONOMY

BY C. H. M.

申

命

記

講

義

クリスチャン古典シリーズ第六集

C・H・マツキン トシ著

山 岸 登 訳

申  
命  
記  
講  
義

NOTES ON DEUTERONOMY

BY C. H. MACKINTOSH

## 序

われらが今から学ぼうとしている申命記の特質は、モーセの他の四書と同じく、きわめて明瞭である。本書の題名から判断するならば、モーセの他の書に述べられている事がらの単なるくり返しであると思われるかもしれない。しかし、それはきわめて重大な誤りである。神のことは単なるくり返しというのではない。神はことばにおいても行動においても、決してご自身をくり返したもうことではない。われらの神の跡を、聖書のすべての部分、被造物の大広野のどこに尋ねても、神の充満性と無限の多様性といちじるしい意匠とを見るのである。これらのことは、われらの心の靈性に比例して、識別し味わうことができる。これらのことを見るために、われらの目は天の目葉をぬられる必要がある。モーセの五書の第五卷の申命記が、出エジプト記、レビ記および民数記の中にしるされている事がらのむなしいくり返しである、とかりにも思うことは、なんとあわれな考えであらう。

人間の著作においてさえ、このような法外な欠点を見いだそうとは思うべきでないのに、神が恵みにより、ご自身の聖書の中に、われらに与えたもうた完全な啓示においては、なおさらのことで

ある。神の靈感を受けて書かれた聖書は、始めから終わりまで不用な文はただ一つもなく、よけいな句はただ一つもない。それ自体に特別な意味と直接の適用性とをもっていない記事は、ただ一つもないのである。われらがこのことを理解していないならば、「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれた」(テモテ第二・三章一六)という聖言の深さと力と意味とを、なお学ばなければならない。申命記は聖書のなかで、きわめて特殊な地位を占めている。それはその出だしの数行によって証明される——「これはヨルダンの向こうの荒野、パランと、トペル、ラバン、ハゼロテ、デザハブとの間の、スフの前にあるアラバにおいて、モーセがイスラエルのすべての人に告げた言葉である」(一章一)。

モーセが、ほんとうにおどろくべき内容を示したときの場所は、以上のとおり、イスラエルの民がヨルダンの東岸に達し、約束の地にはいろうとしていた場所であった。彼らの荒野の放浪が終わろうとしていたことは、第三節で知ることができる。その日時については、第一節で地理上の位置が明らかにされているように、次のようにはっきり教えられている。「第四十年の十一月となり、その月の一日に、モーセはイスラエルの人々にむかって、主が彼らのため彼に授けられた命令を、ことごとく告げた」(一章三)。

このようにその時期と場所とについて、神によって詳細にまた正確に教えられているばかりでな

く、前述の引用文によって、神がモアブの野で民に語られたこのみことばが、出エジプト記、レビ記、民数記などで学んだ事からのくり返しでありようがないことをわれらは学ぶのである。これについてわれらは、本書第二十九章の中にいっそう確かなあかしを持っている。「これは主がモーセに命じて、モアブの地でイスラエルの人々と結ばせられた契約の言葉であつて、ホレブで彼らと結ばれた契約のほかのものである」(二九章一)。

読者は右のみことばに特に注意すべきである。これはホレブの契約とモアブの契約と、二つの契約のことを語っている。モアブにおける契約はホレブにおける契約の単なるくり返しでなく、全く別のものである。このことについては、この意味深い本書を学ぶうちに、全く十分な、はっきりとした証拠をわれらは見いだすのである。

なるほど、本書のギリシャ語の表題は、二度めの律法ということの意味するものであるから、本書はさきに述べられた要点的くり返しであるという観念を与えるかもしれないが、われらは決してそうでないことを確信する。本書が一度述べられたことの単なるくり返しであると思うことは、きわめて大いなる誤りである。本書はそれ自身の特別な地位をもっており、その取り扱う範囲と目的とはきわめて明らかである。本書の始めから終わりまで、くり返して説かれている根本の教訓は、服従ということである。それも単にことばだけのものではなく、愛とおその精神による服従——経

験し、楽しまれてゐる交わりに基づく服従——道德的義務感によって刺激された重厚な影響力のある性格から出る服従である。

年老いた立法者——主の忠実な愛せられた名譽あるしもべは、イスラエルの会衆と別れようとしていた。彼は天に召されようとし、おり、会衆はヨルダンを渡ろうとしていた。したがって、彼の最後の説教は、きわめておごそかで感動的である。彼はイスラエルの人々の荒野での全過程を感動的に印象的に回顧し、四十年の波乱に富んだ荒野生活の全場面と境遇とを、心の奥底の道德的本源にふれる口調で語っている。われらは驚きと喜びをもって、この尊い説教に接するのである。彼の説教には、神から与えられた力強い内容のみならず、語られた時の環境から生ずる、たぐいのない魅力がある。その説くところは、特にその目標であるイスラエルの人々にとつても、また、われらにとつても劣らず有効である。その多くの訴えと勧めとは、ちようど昨日語られたもののように、強い適用力をもって、われらの心に迫ってくる。

これは、聖書すべてがそうではないだろうか。みことばは、われら自身の状態と、おかれている現在とに対してびつたりとあてはまる不思議な力をもって、絶えずわれらに迫っていないであろうか。みことばは特にわれらのために——今日この日にしるされたかのように——要点と新鮮さとをもちつてわれらに語っている。聖書のごときものは他にない。申命記と同年代に書かれた、いかなる

人間の著作をとりあげても、三千年以前に書かれた書き物に、いかなることを発見するであろうか。それは、エジプトのミイラと並んで英国博物館に保存されるべき、われらに、また現代になんの訴えるところもない古代の奇妙な遺物——かびのはえた記録——はるか前に過ぎ去って忘却の中に葬り去られた社会のありさまと物事の状態を示すのみで、われらに實際上なんの効果もない時代遅れの記録の一片にすぎないのである。

それに反し聖書は、今日のための書き物である。神ご自身の書き物——神の完全な啓示である。われら各自に語られている神ご自身の声である。聖書はすべての時代の書、すべての国の書、すべての階級、すべての状態にある者——高い者、低い者、富める者、貧しい者、教養ある者、無知の者、老いた者、若い者——の書である。聖書は単純なことはで語られているので、子どもにも理解できる。しかもその意味があまりにも深いために、最も深い知識をもつてしても、きわめ尽くすことができない。そのうえ、聖書は心の急所を突いて語り、われらの道徳心の奥の源にふれ、魂の中の思いと感情のかくれた根底に達して、われらを完全にさばくのである。ひと言でいえば、聖靈に動かされた使徒が語っているとおり、「神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる」(ヘブル四章一二)のである。

また注意すべきことは、聖書の範圍のおどろくべき広さである。それは二十世紀の習性、慣習、風俗、主義などを、人間歴史の初期に存在したものを取り扱うのと同じように正確に力強く取り扱っている。聖書は歴史のどの時代の人をも完全に熟知していることを示している。聖書の中には、今日のロンドンが三千年以前のツロによって正確にそのまま鏡のように写しだされている。発展の途上のどの時期の人間生活も、われらの神がわれらの教訓のために恵みをもつてしるしたもうたこの驚くべき書卷の中に、名匠の手練をもつて描きだされている。

このような書き物をもつことはなんとという特権であろう。神の啓示をわれらもち、神の靈感によつて与えられた各行から成る書き物に近づき、神によつて与えられた過去、現在、未来の歴史をもつとは、なんとというすぐれた特権であろう。このようにすばらしい特権をだれが正しく評価しつくすことができるであろうか。

しかし聖書は人間をさばくものである——人間の歩みと心とをさばくものである。聖書は人間自身の真相を語っている。それゆえ、人間はこの神の書を好まない。悔い改めない人は、聖書よりも新聞や情欲的な小説を好むであろう。そして新約聖書中の一章よりも、人間の法廷における裁判の記事を喜んで読むであろう。

したがって、また神の幸いな書き物に欠点を捜そうという努力が絶えずある。すべての時代のす



べての階級の無神論者たちは、聖書の中に欠点と矛盾とを見いだそうと苦心してきた。神のことはに対する心を固めた反対者たちは、卑俗な、低級な、不道徳な人々の中にあるのみでなく、教育あり、洗練された教養ある人々の中にもあるのである。ちょうど使徒時代にあったように「町をぶらついているならず者」と「信心深い貴婦人たちは」——この両者は社会的にも道徳的にも互いに大いに隔たっていたが——彼らが心から一致することができると、すなわち、神のことばとそれを忠実に宣べ伝える者らとを徹底的に排撃するという一点を見いだした（使徒一三章五〇と一七章五とを参照）。およそ他のすべての点では異なっている人々も、聖書に対して決定的に反対するといふことに同意するのをわれらは常に見るのである。他の書物はどうでもいいのである。人々は、ヴァージル、ホレース、ホーマー、ヘロドートスの著作に欠点を捜そうとしないが、聖書に対してはがまんができない。なぜなら、聖書は、人間とその属している世との真相を彼らにあげき、彼らに語っているからである。

さて、使徒パウロは、コリント人への第一の手紙で「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（二章一四）と言っている。これは確定的である。パウロは生まれながらの人——いかに学問があり、教養があっても——のことをいっている。彼は特殊

の階級の人々のことをいっているのではなく、悔い改めていない状態の人——神の御霊をもっていない人のことを言っているのである。ある人は、パウロは野蛮人の状態にある者のこと、または未開人のように無知な人のことを言っていると思うかもしれないが、決してそうではない。学をきわめた哲学者であろうが、無学の野人であろうが、生まれながらの人のことを言っているのである。「彼はそれを理解することができない」。それなら、生まれながらの人は、どのようにして神のことばについて判断を下すことができようか。彼はいかにして、なにを書くことが神にふさわしいか、あるいはふさわしくないかなどということができようか。もし人があえて、ずうずうしくも、そうするならば（悲しいかな、その人はずうずうしいのである）、それに聞く者はいかに愚かであろう。その議論は根拠がなく、理論は無価値であり、その著作は紙屑にひとしい。そのうえ、自分が全く知らない事がらに關して語っても、だれも聴衆を得る資格がないということは、前述の一般的に認められる原則に従って当然のことである。

不信仰な著作者たちすべてに對して、われらは、このように結論する。明暗の問題について、だれが盲人の言うところを聞こうとするだろうか。靈感の問題について、悔い改めない人に聞くよりは、盲人に明暗の問題を聞く方がよい。人間の学問がいかに広く、またいかに多様でも——人間の知恵がいかに深くても、神のことばを判断する資格を人間に与えることはできない。いうまでもな